

糖代謝異常を伴う妊婦の 症例報告

高本 偉碩

Iseki Takamoto

東京大学医学部附属病院 糖尿病・代謝内科 特任講師(病院)

はじめに

妊娠中の糖代謝異常(hyperglycemic disorders in pregnancy)には、1)妊娠糖尿病(gestational diabetes mellitus:GDM)、2)妊娠中の明らかな糖尿病(overt diabetes in pregnancy)、3)糖尿病合併妊娠(pregestational diabetes mellitus)の3つがある¹⁾、1)の妊娠糖尿病(GDM)は、「糖尿病」という言葉が入っているため誤って捉えられる可能性があるが、現在では「妊娠中には

じめて発見または発症した糖尿病に至っていない糖代謝異常である」と定義されており、2)妊娠中の明らかな糖尿病と、3)糖尿病合併妊娠は含まれないため注意が必要である。これらの3つの糖代謝異常は、表1¹⁾に示す診断基準により診断する。なお、これらは妊娠中の基準であり、出産後は改めて非妊娠時の「糖尿病の診断基準」に基づいて再評価することが必要である。

本稿では、3)糖尿病合併妊娠の症例を提示する。

表1 妊娠中の糖代謝異常の診断基準

1)妊娠糖尿病：gestational diabetes mellitus(GDM)

75gOGTTにおいて次の基準の1点以上を満たした場合に診断する。

- ①空腹時血糖値 ≥ 92 mg/dL
- ②1時間値 ≥ 180 mg/dL
- ③2時間値 ≥ 153 mg/dL

2)妊娠中の明らかな糖尿病：overt diabetes in pregnancy^(註1)

以下のいずれかを満たした場合に診断する。

- ①空腹時血糖値 ≥ 126 mg/dL
- ②HbA1c値 $\geq 6.5\%$

*：随時血糖値 ≥ 200 mg/dLあるいは75gOGTTで2時間値 ≥ 200 mg/dLの場合は、妊娠中の明らかな糖尿病の存在を念頭に置き、①または②の基準を満たすかどうか確認する^(註2)。

3)糖尿病合併妊娠：pregestational diabetes mellitus

- ①妊娠前にすでに診断されている糖尿病
- ②確実な糖尿病網膜症があるもの

註1：妊娠中の明らかな糖尿病には、妊娠前に見逃されていた糖尿病と妊娠中の糖代謝の変化の影響を受けた糖代謝異常、および妊娠中に発症した1型糖尿病が含まれる。いずれも分娩後は診断の再確認が必要である。

註2：妊娠中、特に妊娠後期は妊娠による生理的なインスリン抵抗性の増大を反映して、糖負荷後血糖値は非妊時よりも高値を示す。そのため、随時血糖値や75gOGTT負荷後血糖値は非妊時の糖尿病診断基準をそのまま当てはめることはできない。

(文献1より引用)